

夢はすべての記憶から

— “マチカネヤマ・アート・フェスティバル” —



夢はバラ色

橋爪節也*

My dreams were born from all memories
— Machikaneyama Art Festival —

Key Words : art, Osaka University, museum of university

東京オリンピック誘致の“夢”を実現したいといったコメントが飛びかうように、現代人は“夢”という言葉が好きだが、歴史上は“夢”という言葉のニュアンスは複雑で、都に上って栄華を極める夢が一瞬に醒める「邯鄲の夢枕」や、織田信長が桶狭間の合戦で「人間五十年、化天の内をくらぶれば夢幻のごとくなり」と舞った『敦盛』など、人の一生など「ゆめ、まぼろし」のようだという意識で無常の象徴でもある。

古典芸能では、古くは十二世紀の高僧、明恵上人が四十年に渡る観行での夢想を記録した『夢記』などが独自の文学世界をつくり、芸能でも、能のジャンルに、この世の者ではない神、鬼、亡霊が登場する「夢幻能」があるし、上方落語では、淀川を往来した三十石船を題材とした「三十石夢通路」の最後を「京の夢、大坂の夢」で下げることもある。夜に伏見寺田屋の浜を発して早朝、天満八軒家に到着する船中での仮眠をイメージしたものだろうが、この下げでは、古き良き時代を懐古する“夢”を意識している。一方、現代では別の意味で生々しい“夢”の記憶があり、東京都江東区の「夢の島」は、かつて広大なゴミ処分地だったし、大阪オリンピック予定地の大阪市此花区の埋め立て地も「夢洲」である。

現実に睡眠から醒めて覚えている夢の大半は悪夢であったりして、“夢”という言葉に希望を仮託す

る現代人の認識は、どこか甘い気がしないでもないが、といったようにひねったことを言っていないで、大阪大学総合学術博物館の館長である私はいかなる“夢”を語るのか早く聞かせろ、と叱られそうである。いやその前に、そもそも阪大の博物館とはなにか？を紹介しておこう。

大阪大学総合学術博物館は、豊中市待兼山の阪大豊中キャンパスにある。“地域に生き、世界に伸びる”という大阪大学のモットーのもと、市街地に残る貴重な里山・待兼山の遊歩道が結ぶ二つの登録文化財、大阪大学会館（旧イ号館、昭和3年竣工）と待兼山修学館（昭和6年竣工）を拠点に活動している。常設展は、巨大なマチカネワニの化石、真空管式コンピュータや、本学の精神的源流である大坂町人の学問所である懐徳堂、幕末明治に人材を輩出した緒方洪庵の適塾の資料などを展示し、企画展では、学術的な研究成果を反映させ、“ユニバーシティ・ミュージアム（総合大学）”ならではの特色ある視点で、「文理融合」も意識したユニークな展覧会を開催してきた。また、阪大の研究成果をレクチャーや交流型のサイエンス・カフェで市民に紹介するほか、貴重資料のデータベースの公開、博物館叢書の刊行も



*Setsuya HASHUZUME

1958年生まれ
東京芸術大学大学院美術研究科日本・東洋美術史専攻修士課程修了（1984年）
現在、大阪大学総合学術博物館館長、大学院文学研究科教授（兼任）
東京芸術大学美術学部附属古美術研究施設、大阪市立近代美術館建設準備室を経て現職。専門は日本東洋美術史。



大阪大学総合学術博物館 待兼山修学館

行っている。

そこで現館長である私の“夢”である。阪大博物館の他館の追従を許さないのが企画展である（とは言い過ぎか？）。国公立博物館とは異なる大学博物館としての限界もあるし、入場無料の施設であり、海外から資料を借りるほどには展覧会予算が潤沢という訳でもないのだが、そこは「文理融合」をモットーに智恵をしばってユニークな企画展を開催しつづけている。私自身、美術史の専門家で、かつては大阪市的美術館建設にも学芸員として携わっており、大学博物館らしいシャープな発想の企画展に新しい“夢”を見たいのである。

本館が開催してきた企画展といえば、たとえば平成21年は、戦前に大阪市が第二次市域拡大で東京市を抜いて日本第一位、世界第六位の「大大阪」になった時代をとりあげて第4回特別展「昭和12年のモダン都市へー観光映画「大大阪観光」の世界ー」、つづいて、大阪を拠点に国際的に活動する前衛劇団・維新派をとりあげた第9回企画展「維新派という現象「ろじ式」」、阪大総長であった真島利行が漆の分子構造を解明したウルシオールがテーマの第10回企画展「“漆”(JAPAN)の再発見ー日本の近代化学の芽生えー」を開催した。漆の展示では、日本美術院国宝修理所から興福寺の阿修羅像の乾漆技法による模造も借りて展示している。

平成22年は、第12回企画展「線の表現力ーアートの諸形態、須田国太郎《能・狂言デッサン》から広がって」で純然たる美術展を開き、平成23年は大阪大学創立80周年記念展・豊中市制施行75周年記念事業・第13回企画展「阪大生・手塚治虫ー医師か？マンガ家か？ー」で手塚治虫をとりあげた。第14回企画展「脳の中の「わたし」と情報の中の「私」ー五感を揺るがす摩訶不思議なメディア技術ー」では、大阪大学大学院情報科学研究科の協力を得て、最先端インタフェース技術を駆使したアート系もまじえた展示を行った。

さらに平成24年は、大阪大学総合学術博物館が創立10年の記念の年である。創立10周年記念・第5回特別展「巨大ワニと恐竜の世界ー巨大爬虫類2億3千万年の攻防ー」は北海道大学総合博物館との共催で、本館開設の原点というべきマチカネワニと恐竜をとりあげた。ちなみに理学研究科前のマチカネワニ発掘現場には、発掘記念のモニュメントが設



大大阪観光展会場

置されている。同じく創立10周年記念展である第15回企画展「ものづくり上方“酒”ばなしー先駆・革新の系譜と大阪高工醸造科ー」では、北摂を中心に酒づくりの歴史や文化、大阪高等工業学校（大阪大学工学研究科の前身）に設けられた国内初の醸造科をテーマとした。

企画展は、大学の研究成果を社会に分かりやすく伝える場であるが、同時に博物館に所属する教員あるいは研究者としては、展覧会を開催することが、研究活動の一環でもある。私は美術史が専門なので、これまでの調査研究をもとにアート系の展覧会を開催したいといつも考えているわけだが、こうした過去の企画展の流れを受けて、いつか実現できればと思っている“夢”の展覧会が、待兼山全体を会場とした現代美術の展覧会である。それも美術史の専門家だから美術展というだけではなく、キャンパス全体を展示にとりこむ、キャンパスそのものをダイナミックにミュージアムとして自由自在に再構成するというのが、博物館人としての私の“夢”なのである。

一般には難解に思われがちな現代美術だが、最近では社会に向けて開かれた形で芸術祭が開催されることが多い。それも都会の画廊や美術館ではなく、地元の協力も得た新潟の「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ」のように、交通の便も悪く人口も減少した過疎地で開かれるものがある。平成22年には、香川県を中心とする瀬戸内の島々で「瀬戸内国際芸術祭ーアートと海を巡る百日間の冒険ー」が開かれ、多くの人が訪れた。大阪近郊でも瀬戸内と同じ平成22年に、宝塚から有馬へ抜ける途中の

西宮市山口町船坂を舞台に「西宮船坂ビエンナーレ2010」が開催されている。

これらの芸術祭では、地域に広く点在している空いた民家や小学校などを会場に、現代美術の作家たちによってインスタレーションがなされ、参加者は、いくつもの地域にまたがる展示を巡礼者のように廻っていく。それも展示だけを追いかけるのではなく、次の会場へと移動する間に地域の人々と交流し、生活を知り、風物を楽しみ、人情に触れるのである。

むろん都心でも街全体でアートを活性化する試みがあり、大阪市内でも谷町六丁目の空堀商店街を中心に古い町家を展示場にした「からほりまちアート」が開催されたり、中之島公園を中心に現代美術のイベントが開かれている。

こうした芸術祭を参考にし、モダニズム建築の大阪大学会館（旧イ号館）、待兼山修学館を展示会場として、待兼山やそれを結ぶ遊歩道にも作品が置かれた“マチカネヤマ・アート・フェスティバル”というのはどうだろうか。昭和初期のモダニズムの遺産である大阪大学会館と待兼山修学館を、残された貴重な里山・待兼山で中継し遊歩道でむすび、大学キャンパスの制約のなか、“夢”についえるかもしれないが、キャンパス全体を自然と歴史が交錯する大きなミュージアムに見たてるダイナミックな展覧会をディレクションしてみたいのである。

かつて私は、大阪市立近代美術館建設準備室の学芸員時代、平成17年に“大大阪”誕生80年記念「モダニズム心齋橋—近代大阪/美術とシティライフ—」（大阪市立近代美術館（仮称）心齋橋展示室）という展覧会を企画したが、その時も展示室だけではなく、近くにある大丸やそごう百貨店の建築、美術品までも屋外展示に位置づけて街ぐるみの展覧会を構成した。地域を取りこみ、社会に発信する展覧会である。それを阪大でも実現してみたい。

加えて修学館の西側に阪大宿舎がある。老朽化が進んでいて、いずれ取り壊されるだろうが、壊す前にそこをアーティストたちに解放して、作品化してもらったらどうだろうか。室内に自由なインスタレーションを行うのである。

この話に興味をいだいたのが、アーティストの伊達伸明さんである。伊達さんは、取り壊される建物を、ハワイアンに用いる楽器ウクレレに変えて保存する「建築物ウクレレ化保存計画」という創作活動をし

ている。ウクレレと言ってもミュージシャンではない。現代美術の作家である。長らく住んだ自分の家や店舗、思い出が詰まった学校や劇場などが取り壊されるとき、一部分でも残したかったと思ったことはないだろうか。伊達さんのプロジェクトは、京都芸術大学時代、三条大橋の廃材によるウクレレ制作からはじまり、平成12年にヴォイス・ギャラリーで「建築物ウクレレ化保存計画」の第1回個展が開かれている。

建物が壊される前、建物ゆかりの人たちに思い出の聞き取りをし、建物のどの部分が重要かを確認して部材を切り出して作品にする。伊達さんはこの計画を、人の暮らしと深く関わった建築物、その廃材を使いウクレレとしてその想いを蘇らせる計画であり、今はなき建築物がより親しみやすい形に姿を変えることで、新しい生活空間で再び歴史を刻み始めると語っている。ウクレレを選んだのは、人が手にし、胸に抱くのに手頃な大きさであり、楽器としても親しみやすいことによる。

制作された作品には、《通天閣歌謡劇場ウクレレ》《愛日小学校ウクレレ》《サンケイホールウクレレ》など大阪ゆかりの建物も多く、最近では、小説家・開高健の東住吉区の旧宅もウクレレになった。災害に関したものでは、神戸の震災復興の《たかとり教会司祭館ウクレレ》《下山手教会ウクレレ》、中座の火災から復興した法善寺横丁の《洋酒の店・路ウクレレ》《えび家ウクレレ》などがある。たかとり教会のウクレレは、テレビの「遠くへ行きたい」が取材し、旅のレポーターであるGONTITIのチチ松村さんが、それを手にして演奏する姿が全国放送された。私の実家のウクレレも制作していただき、大阪歴史博物館開館10周年記念特別展「民都大阪の建築力」で展示されている。過去の思い出が、人間にとって未来を生きるうえでいかに大切か、そしてアートがどれほど人を奮い立たせ、癒すことができるかを、小さな楽器の形をとった作品は切ないほどに訴えかけてくる。

ところで、何かの縁だと思うが、阪大坂下にある阪大の宿舎こそ、伊達さん自身が幼年時代を過ごした家であった。伊達さんの御父君は大阪大学理学部名誉教授であり、その宿舎に住んでおられたのである。調べてみると宿舎は老朽化して空き家であったが、現存しており、特別に室内に入れてもらうと、



伊達伸明《ハシベン・橋爪塗装工業ウクレレ》

内装をしたときの目印として、棚に伊達という名前の痕跡が残されていた。その宿舎を「建築物ウクレレ化保存計画」の一環でウクレレにしたらどうだろうか。これまで他人の家をウクレレ化し、人の記憶を作品化してきたアーティストが、自分の思いのこもった建物をはじめて作品化するのである。そのときどんな感情がこみあがってくるのだろう。

伊達さんが阪大宿舎・旧伊達家のウクレレを制作し、それを“マチカネヤマ・アート・フェスティバル”の原点に定め、展覧会の全体を構成してみたくなった。大阪大学会館（旧イ号館）も本来は旧制浪速高等学校の校舎であったし、待兼山修学館も、かつては病院で、戦後に大阪大学医療技術短期大学部

が置かれていた。そこにも多くの人々の思いが錯綜し、記憶が蓄積されてきたはずだ。待兼山も里山として自然の生態系が重要だが、古くは古歌に詠まれたり、現役の阪大生や数多くの卒業生の思いがこめられている。そうした人の思いや記憶にまつわる展覧会を開催し、博物館周辺を新しい形で活性化するのである。

少年時代、待兼山の遊歩道も遊び場であったことから、伊達さんとは、大ヒットして映画化された浦沢直樹の漫画「二十世紀少年」になぞらえて「まちかねやま少年」という名称のプロジェクトはどうかと話している。

平野俊夫阪大総長は、将来、大阪大学を世界で十指にはいるリサーチ・ユニバーシティにランクインさせたいという“夢”を語っておられたが、欧米の大学博物館の巨大さ、充実ぶりは破格であり、大学博物館がその都市のシンボルとして機能しているところも多いと聞く。日本人は、博物館（特に大学の博物館）と言うと、硬直し徹の生えた資料の墓場といった消極的なイメージでとらえられがちだが、それを覆すためにも、待兼山全体を歴史と自然でつなぎ、人の記憶とアートを加えて地域や社会にアピールすることは、博物館のアクティビティを高めるにも面白い試みだと思う。

「人間五十年、化天の内をくらぶれば夢幻のごとくなり」とは言え、人には自分が存在した痕跡を、他人の記憶や社会、地域に刻んで残しておきたいという欲求がある。“マチカネヤマ・アート・フェスティバル”の計画は思いつきの段階だが、いかにも大学らしい一つの社会実験、研究課題でもあり、興味のある方のご支援を御願いたい。

